

## ワークショップ

# ピアノレッスンにおける ソルフェージュ教育の可能性



森山智宏 ワークショップ

ソルフェージュ教育に力を入れていらっしゃる森山智宏先生がご自身の経験を交えながら、桐朋学園「こどものための音楽教室」の3人の小学生と桐朋女子高校音楽科の弦楽器の生徒たちと共に、授業の様子を実践してくださいました。そこには私たちがピアノを通して音楽を教える際に必要なヒントがたくさんあり、有意義な時間となりました。

### ソルフェージュの必要性

ソルフェージュ教育とは単なる受験科目ではなく音感教育であり、知性と教養の扉を開くツールだと思います。

私が理想とする音感教育とは、親が子供に母国語を教えるような音感教育です。母国語を自然に身につけている感覚で、いつの間にか音感教育ができないかということです。音楽には国籍があります。ヨーロッパ音楽を育ててきたのはヨーロッパの言語です。しかし、私たちが使っているのは日本語です。ヨーロッパとは全く違う言語の中で教育を行わなければならない。これはいくらでもたいへんなことです。

そして音感教育は、知性と教養の扉を開くツールであると思います。指が速く回ること、楽譜通りミスなく正確に弾けること、コンクールで上位入賞を狙うことを音楽と勘違いしてしまわないように音楽と向き合うことが大切です。それらはコンピュータでもできます。楽譜を読むということは歴史と対峙することだと思います。たとえば、ベートーヴェンの楽譜を読むということは歴史を読み解くことです。世界史の知識や外国語の知識がなければ、単に楽譜を読んでいるだけで西洋音楽の本質を学んでいることにはならないでしょう。それらを省いて本当に音楽と言えるのかということ子供と接する中で強く思います。

村上春樹さんの「意味がなければスイングはない」という本の中に、ゼルキンとルービンシュタイン2人のピアニストを比較しているとても面白いエッセイがあります。ルービンシュタインは自伝でも述べていますが、ほとんど練習しないそうです。それでも雰囲気を出して素晴らしい演奏をします。ゼルキンは対照的で練習の鬼だったそうです。家にあるピアノは練習用にわざと弾きにくいように改造され、誰も弾くことができなかったそうです。そのピアノでゼルキンは何時間も練習していたそうです。この2人とも真実だと思います。

ソルフェージュ教育というのは難しいところがあって、正しいとか間違っているとか生徒に言いますが、どちらも真実だという時があります。バッハの演奏に関して、グレン・グールドとギーゼキングは全く演奏スタイルが違いますが、どちらも真実と言えるでしょう。私は作曲家としてよく質問されます。「ここはどのように演奏すればいいですか？」嬉しい質問です。とても嬉しい気持ちで自分のビジョンを伝えます。それと同時に「自分で考えてほしい」とも思います。教師や親が、やるべきことを与えるの



ではなく、「自分で考えるということ」これが教育の視点として欠けているのではないかと自戒を込めて思います。たとえば、ソルフェージュが苦手な人たちのクラスを受け持ったとします。すると、成績を上げるためにテクニックを教え込みます。でもそこに音楽が存在するのか、非常に疑問に思います。しかしソルフェージュ教育が受験のためではなく、いろいろな可能性を秘めているものであるということを考えていきたいと思います。

### 公開ソルフェージュ授業 ～3人の小学生と一緒に～

初見視奏の能力を高めるために一番大切なことは、いたずら弾き・遊び弾きです。それはどういうことでしょうか。モーツァルトのようになんでも弾けるなら良いのですが、私たちにとってこんなに難しいことはないでしょう。作家の筒井康隆さんが次のように述べています。「真面目な文学よりも、いたずらや遊びの文学の方が数倍難しい」もともと真面目な文学を書くよりも、真面目にいたずらや遊びの文学を書くことの方がよっぽど難しいということです。